

は、實に生れて初めてであつた、予は水彩畫界の爲め、この異彩あるミズキ會が益々發展する事を私かに祈つて止まないのてある。

△△△△△△△△△△△△△△  
日本水彩畫會關西支部の復興、豫て事情の爲め休會中であつた關西支部は、この度復興の機運に會し、伏見の岡本氏等主唱者となり、再び研究を開始する事となつた、河合先生を始め、鹿子木、都鳥其他當地の諸先生は、益々確實に當支部の爲めに、賛助指導の勞を取らるゝ事となつた、二月某日藤田紫舟宅に於て、當地の春鳥會員相會し、復興協議會を開いた結果、愈三月から開始する事に決した、孰れ詳細の規定等は「みづゑ」紙上に發表する積りであるが、今度の改訂規定には、欠席者の爲めに通信批評の制も出來て、間接に講師の指導を受くる便利も出來たのであるから、成るべく關西地方に於ける同好者の入會を希望する。(三月十日)

## 新年會の前後——下

ス エ

晝の支度をして歸つて來た時には、もう澤山の人が下の晝室につめかけて居ました。

二階へ上ると(歡樂の鬼)のけいこをやつてゐて、O君がそれを直してゐました。

O君は一日の暇を得て、見物がてら手傳ひに來てくれたのです豫定の一時にはどうせ始まるまいとは思つて居ましたが、二時も過ぎて大體の順備は出來ましたがまだ始める事が出來ません

でした。それはかねて頼んで置いた髪屋が來なかつた爲めなので三時近くなりました、まだ髪屋が來ません。然し御客様はもう會場にすつかりつまつてしまつて、みんな余興の始まるのを待つて居られます。

二階から開會をうながす拍手が聞えます。

御客様係りのY君やM君からはまだか、まだかときいそくされました。私達も全く氣が氣ぢやありませんでした。

でもう窮したあげく、鬢のいらぬ大久保連の喜劇から先によつて其間に(歡樂の鬼)の仕度をして居たら、そのうちには來るだらうと云ふので、兎も角も始める事になりました。第一はハ一モニカ、ソロです。其間に大久保連の仕度をするのですが、大久保連は一人も自分で化粧が出來ないといふので、芝居氣のあるO君や私は扮装掛を云ひつかりました。

其中に二階に拍子が聞えました。あゝ開會のだなと考へながら私はZ君の顔にお白粉をつけました。

ハ一モニカ・ソロ——曲藝——ハ一モニカ・ソロ喜劇(五圓札)

——だんだん番數もすゝみました。髪屋も來ました。

(五圓札)が終り。S君のこしらへが出來ると、呼物の(歡樂の鬼)でした。その間に私は次の(老いたる旅人の使女)の粧をして置かなければなりません。だれかに手傳つてもらふと思つたけれど、誰も彼も二階へ行つてしまつて、残つたのは(老いたる旅人)に出入る人々ばかりでした。私はおぼつかなくも一人で化粧に取りかゝりました。



開幕中は二階もしづかですし、樂屋の中の人々も名々黙つて顔をつくつてゐます。あらしの爲の風の絶え間の様な静けさの中に、私は鏡にうつる自分の顔の異つて行くのを不思議なもの様に見て居りました。

Y君の顔もKさんの顔もずい分かはつてしまいました。髪や鬚を白く塗つて深いしわを作りますと、さしづめジョン・ガブリエル・ホルクマンが二人出来上りました。

そうして居る所へ（歡樂）の連中がどや／＼と這入つて來ました。そして最初に出るAさんとKさんは二階へ上つて行きました。

しばらくすると私達の出になりました。私は鬚が駄目なので、頭に白い布をかぶつて二階へ上りましたら、確にあつたはずの脚本が見えません。

さあ私は弱りました。白だけはどうかやら知つて居ても、まだ出の所がよくわからなかつたものですから――。然し其の場合ぐづ／＼してはいられません。幕のかげでY君に一通り教へてもらいました。

舞臺ではKさんの第一の旅人が窓ぎわの獨白が終りました。私はY君を導いて舞臺に表はれました、「彫刻的に々々々々」とさう考へながら――。二三の對話があつて、旅の詩人は「酒をくれい」と云ひます。私は命ぜられるまゝに上手に這入りました。

酒の瓶をもつて再び出て、卓の上の盃につがうとしました時、

人々の眼はすべて私の手にそゝがれて居ました。

パツと強い光が私のまわりを飛びました。其刹那に私は「寫真だな」と考へましたものゝ、あまり不意だつたので、ちよつとよろめきそうになりました。

「赤い酒だな。これは何と云ふ酒かな。」

「赤い酒で……」云ひかけて、はつとしましたかもう遅い。えゝまゝよこ云ふ時に舞臺度胸を出すのだと思つてそのまゝ言葉をつゞけました。本當は「唯の赤い酒です」を云ふのでした。

Y君も一時まごついたらしく私の顔を見上げました。それで私が一寸合點々々をして見せたら、Y君も先をつゞけてくれました。

その外その幕の内いろ／＼お客様には見えない失策がありました。F君の老婦人の持つて出るべき燭臺の足が大きな音をたてゝころげ落ちた事。鐘の音や晩歌のしらべの出し所にまごつた事、ことには窓外の暗を表すつもりで、窓にしてある紙片を私がぬき取つて、舞臺の上のKさんやY君をまごつかせたなどは一番の失策だつたでせう。

幕になつてから。も一度舞臺面の寫眞を取つて、私は急いで下りて來て樂屋に這入りました。そして私の（ねんねえ旅籠）の扮装に取りかゝりました。顔のお手本は（寂しき人々）のケーテ・ナツケラートでした。

自分の顔を作つて、Kさんの顔を作つて居るとコルニピーネー――女中――のG君が來ました。見れば赤つ毛で、眉毛は薄く、



そして頬つべたは赤くそめた、太つちよの毛唐の娘は、まことに申分の無い化物でした。

「やあ化物々々」

「素的な化物だなあ」

人々はG君を取りまいて口々にこう云ひました。

二階ではL君のダルマ・ダンスをやつぬました。賑やかなオルガンの音と笑聲や拍子にまじつて、いつものドタリバタリの足音が手に取る様に聞えました。

私は胸の所へ乳房を入れてスカートを着けるとすつかり出来上りました。

「畜性美しい女になりやあがつたなあ。」

「よいしよやけます。」

其内に出のしらせがありました。私達は二階へ上つて行きましました。

私の家はすつかり出来て居りました。真中の大きな窓から来るおだやかな光は植木鉢のシダをくつきりと見せてオルガンの中には二枚の日本の錦繪、其他に二三枚、水繪や油繪の額が壁にかかつて居ります。

五君のフロックコートを借り着した。私の夫は、窓ぎわの机によつて手に封を切つた手紙を持つて居りました。私は少しはなれて腰をかけて、膝の上に縫取をしかけたハンケチを持ちました。

幕の外ではY君のマナーデチャーが説明して居ます。

Y君が這入つて来ると——デバ……と幕があがりました。私達はそれから獨逸の或る家に起つた二日間の出来事を演じました。

第二場。第三場。順に終つて樂屋に歸るともうがつかりしてしまひました。

終りの(平維盛)はもうやる人々がだれて居ました。唯好い加減にお茶をにごしたと云ふまでです。

然し其次の大久保連の喜劇は大相よかつたそうです、それで新年會は打ち出しました。

新年會のあと二三日は誰れも彼もぼんやりしてると云つて居ました。

四五日たつた或日O君から私のもとへ手紙が來まして、それに次の様な事が書いてありました。

「今日は愈病人も室内の運動を許される様になりましたので、少し余暇が出來ましたから先日の余興に付いて思い付いたまゝを書いて見ます。

研究所へ行つてまだ始まる前に舞臺を見た時は觀客席が暗くなつて居て、舞臺だの瓦斯の光りが青く輝いてゐた爲か、ちんまりした感じの好い舞臺が出來たと思ひました。

然しいよいよ開幕して觀客席へも瓦斯をつけると始めの感じは大分無くなつたやうでした。

ですが幕ごとて其感じもいろ／＼でした。(五圓札)の時は忙がしいので主人の歸宅から腕おしまで見ましたが大變舞臺が廣く



見えました。

そして中々面白く見ました。K君の主人のあの芝居的のこなしが生きて見えてはまり役でした。Z君の手代も上出来でしたが物の喰ひかたに少し工合の悪い所も見えました。M君の役は中々無圖かしい役でしたが巧にやりました。只歩き方が氣になりました。總じて成巧です、ことに腕おしなど非常に受けました。

(歡樂の鬼)はバックの後で本読みをしてゐたので少しも分りませんでした。F君の聲がふるへて來た時は(高島屋)と、どなりたかつた。F君の聲がふるへて來た時は(高島屋)と、どなりたかつた。

(老いたる旅人)これは斷じて見落すことは出来ないと思つて始めから終りまで見ました。見て居ても嬉しさに胸が波立ちました。

観客もあの時ばかりは咳一つしなかつたは有難かつた。

僕の代理としてI君の旅人はこれも僕なんぞの及ばない所がありました。急の代役の爲に多少の絶句はありましたが、それは僕の様全部を暗んじて居る者が見ての事、知らない人には必ず分からなかつたせう。

落ちつきのあるしつとりした聲があつた一つの原因です。K君が代つてくれたのはあの脚本の爲に嬉ぶべき事でした。Y君の旅人も無論上出来でしたが唯二人共黒いマントが少しバックと見分けがつかぬすぎた様に思ひます。F君の婦人も結構、君のお説の通りも少し芝居をしたら猶よかつたせうこ

れは臺のせいですが、かりがれがとうも氣になりました。時々横に向いて燭の火に下から顔の半分は照らさせたのは極くよい思ひつきで非常に夢幻的の感じを深くしました。二人の使女も此の感じを大變助けて居りました。

第二の旅人の出た時K君の原の場所へ戻るのが少し早かつた様です。二人のマントが如何に黒くても、燈火はあれより明るくはいいけません。中々面白く見ました。

KI君の歌にA君のオルガンこれは本物です。それにA君のなりが大變よくうりました。

それから(ダルマダンス)幕の開いた時A君の白衣とあまり濃くない赤いダルマとが瓦斯の光に非常に美しく見えました。ダンスと云ふより寧ろオペラと云ひ度い位よかつた。

(れんねん旅籠)此の時と(ダルマ)の時が一番舞臺が廣く見えましたが、そして明るくいよい感じ——恐らくは君の考へてゐた感じだつたでしょう。先生方の席で自由劇場のやうだと云ふ聲が聞きました。

残念ながら二幕迄で歸つたので分りませんが一日中であれが一番の出来でした。

役々は總てが豫想以上の出来でした。K君の主人、顔もつくりも聲の調子迄其人らしくてよく。君の妻君亦然りだ、只難を言へば乳のふくらみも少し上へ行つて欲しかつた。姿は大變ほつそりして理想的でした。G君の下女、これは脚本ではやせてるかですがあの場合、かへつてあの位の方が好いだらうと思



ひます。立てから見ても横から見てもあゝ云つた風の下女らしくてよいと思ひました。只三幕目を残したのでG君の活躍するのを見なかつたのは残念でした。O君のクラーゼンはなりだけ見ましたがこれも思ひの外でした。

シユマールベルクの時のトンチンカンの對話。「お前に少し聞きたい事があるがね」と云ふ六敷い所などしつくりと合つたし幕切の天花紛の工合など素的でした。あの劇ばかりは一日中で一番見でがありました。また素人ばなれがして居りました。これは御世辭ではありませぬ。皆の定評です。

何しろ此度の劇で我々がやるには暗いものより明るいものの方がよさそうに考へました。

兎に角デッサンの合間にやつたものとして望外の成功でしょうくだらない事を長々と失禮。

諸君によるしく、寫眞が出来たら是非ね。

S 様

O より

鯨

テ ッ タ ロ

先年僕は中國山脉に深く分け入つたことがあつた。車の通ふやうな道もなく、彼方此方に賤の藁屋があるのみで、實に淋しい處であつた。無論宿屋などはないので、その邊でかなりいいといふ百姓の家に泊つた。そしてその家の襖にこんな畫が描いて

あつた——重箱のやうな、そして上面を黒く塗つたものが、子供が樂書にかいたやうな波の上に乗せて、そして向ふ方には、帆船らしいものが二三浮んで居た。何だかどうして了らなかつたが、やつと思ひ付いて見ると、驚いたことには、これが此邊で信じて居る生きた鯨であつた。

僕等の畫にも、一段高い人の眼から見ると、この鯨のやうなことがありはせんだらうか。

### 水貼ブロックに就て

大阪富岡生

前々號に水貼ブロックの事が出て居たが小生の經驗を書いて見る。

○ 紙は下のより順に少しづゝ大きい方がよい。同じだと紙と板との間が工合が悪い尤も三枚位ならかまわぬ。

○ 貼る時紙と板との間に強い糸を入れて貼り其の端を少し出して置くときめる時に小力を要せず外の紙まではがれる事がない。但し小生は摸造紙を用ひる故日本紙の強いのではうまく行かぬかも知れぬ。

○ 下から番號を紙の端に記して置くとあと何枚残つて居ると云ふ事が知れて便利である。